

ちょっと ブレイクしませんか?

守銭奴

第 7 回

イソップ物語に「守銭奴」という小話がある……守銭奴が全財産を金(かね)に換え、金塊を買って、それを城壁の前に埋めると、しょっ中出かけて行っては検分していた。近くに住む職人が男の足繁く通うことに気づき、事の次第を推し量って、男が立ち去った後に金(きん)を盗みとった。男は次にやって来ると、そこが空っぽになっているので、泣きわめき髪を篋(むし)った。身も世もあらず嘆いているのを人を見て、訳を知って言うには、「おまえさん、悲しむことはない。同じ場所に石を埋め、金(きん)だと思ふことだ。有る時にも使わなかったのだから」

映画「マルサの女」(87年日本)は、故伊丹十三とその奥さん宮本信子の見事な合作だ。

税務調査官の亮子は、脱税を徹底的に調べるやり手だった。ある日、彼女は一軒のラブホテルに目をつけ、そのオーナー権藤が売上金をごまかしているのではないかと調査を始める。権藤には内縁の妻、光子がいた。そんな時、亮子は国税局査察部に抜擢され、マルサの女としての調査経験を積み、上司の花村と組んで権藤を調べることに。ある時、権藤の元愛人・和江から彼の今の愛人が毎朝捨てるゴミの袋を調べるとタレコミがあった。やっとのことで証拠の書類を見つけ、遂に権藤邸のガサ入れが決まった。亮子が邸に入ったが、証拠は何も出て来なかった。花村は権藤に質問し、亮子に眼の動きを追えと命令する。そして、本の中をしらみつぶしに探すが徒労に終わる。疲れた亮子が立ちあがって、体を伸ばし本棚にぶつかった途端、壁が動き奥の隠し部屋が現われ大金が見つかった。その頃、久美子の部屋では口紅に隠された多くの印鑑が発見され、銀行でも架空名義が見つかった。権藤から貸し金庫の鍵は光子が持っていると言われ、花村は聞かされ、光子から鍵を受け取る。突然、亮子が以前忘れたハンカチを出した権藤は、ナイフで指を傷つけた血でハンカチに残りの貸し金庫の暗号を記して渡し、マルサの女は勝利するのである。



イソップの小話「守銭奴」は現代人の守銭奴映画にも通じる。お金は貯めるためにあるものではない。食欲や睡眠欲は上限があるけれども、名誉欲と金銭欲は限りがない。しかし、金は天下の回りもの、途中で堆積するよりは、回り回って使われる方が生かされる。大金を持って棺桶に入るわけにも行きません。消費と貯蓄のバランス、老後の心配もありますが、皆さんはどうお考えでしょうか。

精神科医・映画評論家

かゆ かわ ゆう へい
粥川 裕平

国立大学法人名古屋工業大学
保健センター長
大学院産業戦略工学専攻教授

